

【資料】

仏蘭西人の観たる永井荷風

— 附 アルベル・メーボン著『今日の日本』における荷風言及箇所訳文 —

岸川 俊太郎

終戦の翌年に発表された永井荷風の文章に、「仏蘭西人の観たる鷗外先生」(『太平』、一九四六・二)という一篇があることは、果たしてどれほど知られているだろうか。

「はしがき」に、「仏蘭西人アルベル・メーボン著今日の日本と云ふ書に著者が鷗外先生を上野博物館に訪問したる記事あり。大意左の如し。」とあることからわかるように、この文章は、「グランド・ルヴェューの訪問記者たる任務を帯び」たメーボンなるフランス人が鷗外を訪ねた際「1」の回想を、荷風が訳出したものである。鷗外の日記に記された、「参観。仏人 ALBERT MAYBON 與後藤末雄俱至」という記述にしたがえば、このメーボンの訪問は、一九一九(大八)年四月一六日のことになるのだが、興味深いのは、荷風の日記、『断腸亭日乗』(以下、『日乗』)にも、次のような

記述が残されていることである。

午後小川町仏蘭西書院へ書冊を注文せむと門を出るに、快晴の空次第に暗く、電車通に至る時、驟雨濺ぎ来る。神田に達するや空既に霽れたり。書院店頭にて巴里タン新聞の記者メーボン氏に逢ふ。氏はマルセイユの人にて少年の時浮世絵を見て夙に日本の風物を愛せしと云ふ。氏は南方の人なるを以て日本の青年のイブセン、ストリンドベルヒの如き北欧の文学を愛読する所以を知るに苦しむと言ふ。余も亦北方の文学については深く嗜むところなきを以て、氏の言ふ所に随つて南部仏蘭西の風景と生活とを称美したり。

(一九二二(大一一)・三・二〇)

メーボンの鷗外訪問からおよそ三年後、仏蘭西書院の店頭で、荷風もまたメーボンと会っていたのである。

残念ながら、このほかにメーボンと直接会ったことを示す荷風の記述は残されていないのだが、だからこそ、その後の荷風の振る舞いというものが、一層眼を引くことになる。荷風が、メーボンの鷗外訪問の記述を含んでいる『今日の日本』なる書物を読んだのは、『日乗』によれば、一九三四（昭九）年二月八日のことなのだが、その二年後の一九三六（昭一〇）年一月四日の日記に、荷風は、早くも、このメーボンの回想部分を訳出しているのである。この抄訳が、戦後に発表される「仏蘭西人の観たる鷗外先生」の原型となるのだが、特筆すべきは、それが、流麗な文語体によって丹念に訳され、現行の『荷風全集』本文にして四頁という異例の長さに及んでいる点である。さらに、一九四三（昭一八）年一月二三日の『日乗』には、「日本医事新報社より森先生に関する評論の草稿を求めらる。メーボン氏著今日の日本の一部を訳して渡す」とあり、この時点ですでに、荷風が、訳文を雑誌掲載段階のものにしていたこともうかがえる。このように、一連の荷風の振る舞いから

は、図らずも、メーボンに対する一方ならぬ荷風の思いが浮かび上がってくるのである。

では、『日乗』に、たった一度の出会いしか記されていないメーボンに、なぜ荷風は、そこまでこだわるのだろうか。

『極東問題を論評する主要外国人』（外務省情報部・編、一九三六・五）によれば、メーボンは、第一次世界大戦下の一九一六（大五）年一月に、フランスの外務省の命を受けて来日し、一九二三（大二）年に帰国の途につくまで、東京を拠点に、日仏交流に関わる事業を積極的に展開した人物である。とりわけ、自らが「社長兼主筆」を務めた日仏二ヶ国語表記の雑誌、『極東時報』は、一九一六年の創刊から一九二〇（大九）年に終刊を迎えるまで、通算一〇三号を数えた^{〔2〕}。一方で、メーボンは、『日本の演劇』(Le théâtre japonais, H. Laurens, 1925) といった伝統文化に関する著書をはじめ、ヨシトシ・マサオミと共に有島武郎『或る女』の前篇 (Cette femme-là, Flammarion, 1919) を初めて仏訳するなど、日本の文化・芸術に対しても高い関心をもっていた。

このように、メーボンは、同時代のフランス政府の極東

政策を背景としながら、大正期の日仏交流の様々な局面で、貴重な役割を果たした人物であり、足かけ八年に及んだ日本での活動をもとに著されたメーボンの日本印象記が、『今日の日本』だったのである。本書の正確な書誌情報を記せば、Albert Maybon, *Le Japon d'aujourd'hui, Ernest Flammarion: Paris, ©1924* である。全体の二八三頁

に及ぶ本書の構成は、「思想」(第一部)、「文学」(第二部)、「革命的精神」(第三部)の三部からなり、荷風が訳出した鷗外に関するメーボンの記述は、第二部中に記されている。しかし、この程、筆者が原書を繙いてみると、新たな事実が明らかになった。すなわち、荷風が訳出した、鷗外に関する記述のすぐ後には、メーボンの荷風小論とでも言うべき、看過できない一節が続いていたのである。

先述したように、メーボンと荷風の遭遇は、『日乗』に一度しか書き残されていない。しかし、この文章の発見によって、両者の関係が予想以上の意味と接点をもっていたことが、明らかにされてきたのである。例えば、その一節のなかに次のような記述がある。

時々、晩に、東京の仏蘭西書院で、私は、新刊書の陳列棚の前にいる永井氏の優雅な立ち姿を認めた。悟りきったこの愛想の良い人物には、溢れんばかりの穏やかさが保たれていた。雑談の思い出は、彼の口にした言葉とともに私の中にとどまっている。

日記に唯一、記された荷風とメーボンの出会った場所は、仏蘭西書院であったが、この新事実を踏まえると、両者の関係は一期一会のものではなかったことがわかる。実際、荷風は、この時期、仏蘭西書院に足繁く通っている。仏蘭西書院は、一九一九年、神田一ツ橋に開店したフランス語書籍専門店なのだが、この書店を設立した人物こそ、メーボンだったのである。そして、この仏蘭西書院を舞台に、密やかに積み重ねられていった荷風とメーボンの交流が、『今日の日本』のなかのメーボンの回想となって結実していったと考えられる。これによって、初めて、荷風のメーボンに対する一方ならぬ思いの意味も解き明かされてくるのではないだろうか。

期せずして、仏蘭西書院を舞台に結ばれることになった

荷風とメーボンの交流は、また、両者の個人的な関係性を

超えて、両者がともに、様々な政治的、文化的な折衝の織り込まれた、「日仏交流」という時代のうねりを生きていたことをも明らかにしている。その意味で、『今日の日本』における荷風小論は、メーボンの幾つかの事実誤認やオリエンタルなまなざしが混入してはいるものの、しかし、それゆえにこそ、同時代を生きた、一人の「仏蘭西人の観たる永井荷風」像として、貴重な時代の証言足りえているのである。最後に、『今日の日本』における永井荷風の言及箇所を、ここに訳出しておきたい。

【資料紹介】

アルベール・メーボン著『今日の日本』における永井荷

風言及箇所訳文

【書誌情報】

Albert Maybon, *Le Japon d'aujourd'hui*, Ernest

Flammariion-Paris, ©1924, p89~94

〔訳・岸川 俊太郎〕

森鷗外と同じ流派の、もう一人の文学者、永井荷風氏（記者注——Nagae Kofuと誤記。正しくはNagai Kafu）は、一八七九（明二二年）に生まれた。彼は、「日本郵船会社」という船舶会社の支店長の息子だったために、実業の道歩んだ。しかし彼は、気晴らし、散歩、そして自分を夢見心地にさせる尾崎紅葉の物語を愛していた。家族は彼をアメリカへ送り出し、彼はそこで銀行見習いになった。彼は、機が熟するのを待つてフランスへ渡航した。フランスは、この芸術家の魂を烈しく魅了していた。数年の滞在を経て、帰国したとき、日本の文壇では自然主義が勝利を収めていた。永井氏は、この文学を陰気で粗野であるとみなし、これに対する反感を隠さなかった。また、彼は、自己陶醉をして、果てもなく恍惚となる自然主義の作家たちに、軽蔑を露わにした。彼は、本来の美と相容れない東京の景觀にも憤らずにはいられなかった。それは、近代主義者の愚かな発想のために傷つけられ、アメリカニズムに毒されてしまったのである。この、生粋の江戸の息子は、自分の家に引き籠ることを決意し、東京の母の面影を認めていなかった

た。彼は、成金、政治家、術学者たちを声高に非難した。彼らは、儒学者や享楽主義者の文明の最後の名残を破壊し、また、すばらしい夢を殺してしまった。

徳川幕府は、すでに奥深い過去のなかに葬られてしまつたが、その秘密を守っている者たちの心の内では、今もなお、魅力的な輝きを映し出している。永井氏は、私が前に話した東京の下町に慣れ親しんだ者の一人であり、彼は、こうした下町の魔法めいた魅力のすべてを知っていた。「芸者」(お茶屋の踊子)や「花魁」(吉原の高級娼婦)、そして、その他の古の事物の数々が彼の心に訴えかける。彼は今なお、慣れ親しんだこれらの幻影を再び思い出すのだろうか。彼はある日、私にこう言った。

「もう、江戸の名残について話すのはやめましょう。かつての東京、そのようなものは、もはや存在しないのです。全く何も残つてなんかいませんよ。はじめて路面電車が走るようになった日から、それは、すっかり過去のものとなつてしまったのです。」

永井氏は、諦めのこもつた微笑を浮かべた。彼は、もはや現代に対して反抗しようとしなかった。彼の抗議の姿勢

も警鐘を鳴らす彼の叫びも、また、江戸の面影を残した最後の表情を大切に扱おうとした彼の願いも、理解されることはなかった。そして、彼はもつとも完璧な孤独へと逃げ込んだ。彼の幻滅した感情は、彼に、『冷笑』と題することになる、ある作品についてのインスピレーションを与えた。

それは、賢明なる諦観という見かけをもとにした、今日の社会に対する鋭い風刺である。しかし、ページの合間には、この芸術家の流派にとつて望ましいディレッタンティズムが、鮮やかな色使いのもとに、満ち溢れている。そして、悦楽と幸福についてのモラルは、控え目でさりげない、繊細なくつかの教訓から明らかにされる。これらの教訓は、それらになじんでいた過去へと、絶えず立ち戻ることによつて理解されるのである。

永井氏は岩野泡鳴と同族の人ではない。後者の泡鳴は、根源的な力として登場した。彼の叫びは遙か昔の時代の叫びであり、荒々しい情熱、勝ち誇つた欲望、ただちに満足させるべき欲望、むき出しの精神、そして斬新な知性をもつ叫びとしてある。言い換えれば、それは一人の創造者である。一方、前者の永井氏は、錦の衣のように輝いている

全き感傷性を身にまとう。倦怠と憂愁が、美しく、学識のある完成された血統を引く姿勢と愛着のなかに存在する。永井氏は、まるで徳川時代にいたような文明人の一人なのである。

また、好んで引用されるある作品のなかで、彼の芸術的な知性は、東京にある將軍の墓や芝公園の寺院に向けられている。彼は、近くの大通りを往来する人々がもはや理解することのできない、これら建造物のもつ密やかな意味を表現した。この本は、世に埋もれてしまった闇の中から、これら厳かな寺院を引き出したのである。それだけではない。老いた東京の陰と苔のなかで失われ、親密さと静けさをもつ甘美な、どれほど多くの仏陀の住まいが、この詩人によって見出されたことか。

フランスから帰ってしばらくすると、永井氏は、自由な校風の慶應義塾大学において仏文科を創設した。慶應には伝統があり、江戸時代の古くから続く家柄の者が自分たちの子弟を送り出していた大学である。彼の思想は、近代文学の知識に基づいているが、徳川時代における中国の儒教とも結びついていた。彼は、アンリ・ド・レニエ、初期の

モーリス・バレス、アンドレ・ジッドに対して際立った関心を示していた。彼の教授方法は、あまりに個性的過ぎたために、必要とされる教育とは一致しなかった。彼は大学を辞めた。彼はまもなくして、ド・レニエの影響が認められる二、三世紀前の社会の復権を描いた、いくつかの詩的な中編小説を生みだした。これら魅力的な作品は、読者を彼のもとへ引きつけたが、作品の近代精神に対する毒舌は、読者を少しばかり怖気づかせた。しかし、永井氏はほとんど読者を気になかなかつた。彼は自分自身の楽しみのために書いた。そして、彼が読者に話しかけようとするときは、読者に、いくつかの厳しく辛辣な言葉を投げつけようとするときなのである。彼の冷笑は、容易に呼び覚まされるのだ。

時々、晩に、東京の仏蘭西書院で、私は、新刊書の陳列棚の前にいる永井氏の優雅な立ち姿を認めた。悟りきつたこの愛想の良い人物には、溢れんばかりの穏やかさが保たれていた。雑談の思ひ出は、彼の口にした言葉とともに私の中にとどまっている。私たちは日本に押し寄せたロシア人作家たちの一大流行について話し合っていた。永井氏は

通行人の行き来に微笑みを浮かべていた。

「地方人が東京を侵略したのです。彼らは日本の精神とは反対の考えと感情をもっていました。ロシア文学の愛読者であったのは彼らです。彼らは自然と、自分たちにとつて全くの敵であるもの、毒であるものの方に向かつて行つたのです。東京は、かろうじてこの伝染病から免れることができませんでした。健全で確固とした旧家の家庭のなかでは、優れた伝統というものが、より良く保たれていたからです。」

私は、日本の根源的なものに関心をもつ新たな風潮について指摘した。永井氏は、何冊かの本を、素早く自分の手の届くところに置きなおした。

「原初的な日本、それは未開です。中国が日本の文明を作ったのです。中国の影響以前は何もありませんでしたよ。中国に学びに行つた日本の僧侶たちが、我々の国の貢献者だったのです。私たちのより良き時代、それは鎌倉時代であり、徳川時代であつたわけですが、こうした私たち文明の礎には、中国文明の繁栄があつたのです。」

永井氏はまた、文化主義といった現代の哲学の潮流に対して、そして、中国の賢人によって伝えられた儒教と快樂

主義の範囲外のすべての知識の表明に対して気にとめることはなかった。彼によれば、同時代の文学作品は、すべて外国文学の模倣である。そして、こうした文学のなかで、彼にとつて取り上げられるに値するものは、何もないように思われた。ただ唯一フランス文学だけが、この頑固な魂の寵愛を受けることができた。そして、永井氏は、彼らの教えがこれほどまでに長い間顧みられなかったことを嘆いている。

「四〇年もの間、人々はフランス語を読む習慣を失つていたので。私たちの国の自然主義者は、その大半があつたの国のモーパッサンやゾラの思想というものを直接に触れることはできなかったので、彼らをあなたの国の自然主義者の弟子とみなすことはできないでしょう。」

永井氏は、もちろん、すべてのフランスの作家を認めているわけではない。彼の偏愛する作家は、躊躇なく示されている。彼は、優れたインスピレーションを与えた作家しか名前を引き合いに出していないが、こうした作家たちとは、レミ・ド・グールモン、アンリ・ド・レニエ、アナトール・フランス、エゴチスト *egotiste* の三部作におけるバ

レス、アンドレ・ジッド、ロマン・ロランといった、雑誌『明星』のなかで好んで触れられたディレタント派の作家たちである。そして、この、見事な挿絵の入った豪華な雑誌のなかにこそ、永井氏、森（鷗外）氏、若き日の有島氏、与謝野鉄幹・晶子夫妻といった、芸術上のディレタントイスマの偉大な作家の名を認めることができるのだ。おそらく、彼らこそ、もっとも鋭敏で、もっとも知的なフランス文化の信奉者たちなのである。

〔注〕

1 メーボンの鷗外訪問に関しては、須田喜代次「〈資料室〉 鷗外の仏文」『日本近代文学』一九八七・五の指摘がある。

2 『極東時報』とメーボンに関する詳しい考察については、拙稿「もうひとつの『ふらんす物語』——アルベール・メーボン社長兼主筆『極東時報』から永井荷風まで——」『比較文学年誌』四六号、二〇一〇・三を参照されたい。なお、筆者が作成した

『極東時報』の総目次は、リテラシー史研究会ホームページ（<http://www.f.waseda.jp/la-wada/literacy/>）にて公開している。

あわせて、拙稿『極東時報』という〈日仏交流〉——『極東時

報』総目次の公開にあたって」『リテラシー史研究』第三号、二〇一〇・一も参照されたい。